

世界とつながった絹の道

絹の道が
生糸の他に
運んだものは？

八王子から横浜へ、そして世界へ、生糸を運ぶ道としてにぎわった絹の道。横浜に居留した西洋の人々がこの道を通り、西洋の文化も運びました。絹の道を通じて世界とつながった八王子の人々の生活がどのように変化していったのか、紐解いてみましょう。

絹の道



養蚕農家の様相をよく残している小泉家屋敷



絹の道資料館と鎌水の景観

八王子の中心部から鎌水を通して横浜へ至る浜街道は、輸出用の生糸の流通路となり、後に「絹の道」と呼ばれるようになりました。

安政6年(1859年)の横浜開港により、桑都八王子はいち早く新しい時代を迎えました。谷戸に囲まれた中で農業や養蚕などを生業としていた鎌水は、外国人遊歩規定で定められた横浜から40キロメートルの圏内に位置することから、日本の養蚕に興味のあった西洋人から注目されました。考古学者のハインリヒ・シュリーマンや写真家のフェリックス・ベアト、スイス人の商人カスパー・ブレンワルドなどが、浜街道を通過しながら、八王子宿や養蚕の様子などを旅行記や写真に残しています。

明治時代に入ると、八王子と横浜を結ぶ浜街道は、生糸商人や西洋人が行き来するようになりました。南多摩郡鎌水村の商人は、生糸の売買で大きな富を得て、沿道の大塚山に道了堂を建てたり、諏訪神社に石燈籠を寄進したりするなど、文化的な功績も残しました。さらに、生糸商人が横浜で見聞した西洋の新しい文化や横浜での出来事を鎌水へ、そして、八王子の中心部へ伝えていきました。

生糸商人が 住んでいた鑓水

鑓水は、多摩丘陵の中にあり、傾斜地に水田や畑とともに桑畑もたくさんありました。幕末から大正時代にかけては、養蚕がたいへん盛んに行われました。当時の養蚕農家の民家建築の様式を伝える「小泉家屋敷」が今も鑓水に残っています。母屋の中では養蚕が行われていました。鑓水の人々は、多摩丘陵の中で自然とともに生業を営んでいました。



小泉家屋敷

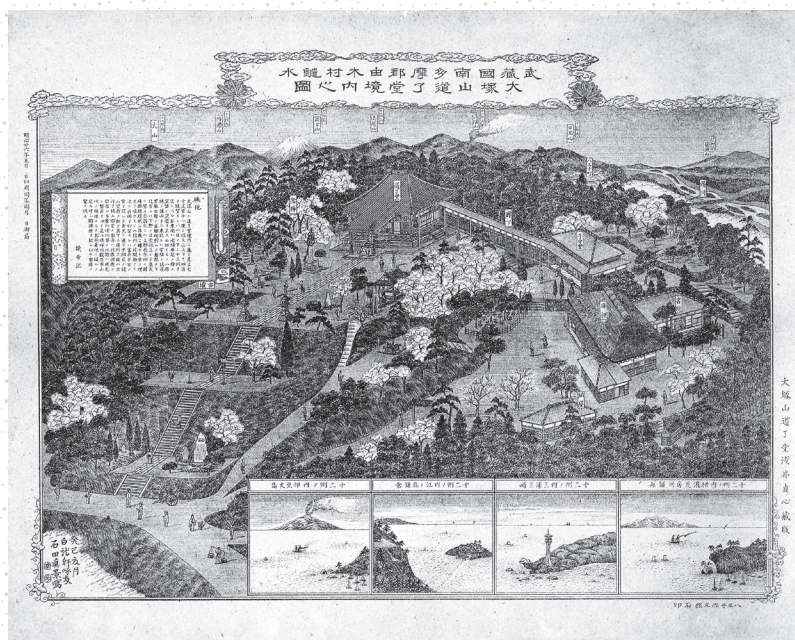


鑓水ののどかな田んぼの風景



生糸商人の八木下要右衛門屋敷跡（絹の道資料館）

19世紀後半の黒船の来港をきっかけとした横浜開港による生糸輸出の増加により、のどかな農村で農事や養蚕を行っていた鑑水の人々の生活が一変していきました。鑑水には元々、周辺の村々から集荷した糸を八王子宿の市で売る生糸商人がいました。彼らは、開港を機に、八王子宿の市で取引されていた「八王子糸」を買い取り、鑑水峠を越えて横浜へと運んで生糸を売ったことから、後に「鑑水の商人」と呼ばれました。この商売により富を得た鑑水の生糸商人の八木下要^{やぎしたようえもん}右衛門は見事な石垣のある屋敷を築き、「鑑水の石垣大尽」とも呼ばれました。現在、この屋敷跡には絹の道資料館が建っています。



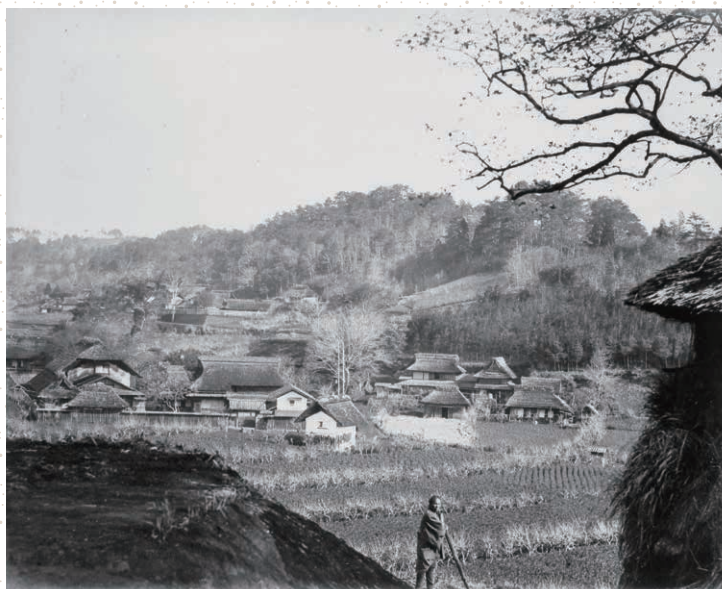
武蔵国南多摩郡由木村鑑水大塚山道了堂境内之図

鑑水の商人たちは、築き上げた富を地域の観光振興のためにも投じたようです。現在、大塚山公園には、道了堂の跡が残っています。明治7年(1874年)に村内の生糸商人からの寄付によって建立され、浅草花川戸から遷された道了尊や書院、庫裏などの建物が並び、何本もの桜が整えられました。さらに大塚山は「十二州見晴し」と呼ばれるほど風光明媚な場所でもありました。大塚山は現代的な言い方をすれば、一大観光スポットとして開発されたといえるでしょう。

外国人が記録した 絹の道とその周辺の風景

鎌水の古い地図を開くと、「浜道」と記された一本の道があります。文久3年(1863年)ごろ来日したフェリックス・ベアトというイタリア生まれの写真家が撮った、当時の日本の風景写真が横浜開港資料館に数多く保存されていますが、その中の2枚に幕末期の鎌水の村の様子が写っています。このうち「View on the Road to Hachioyu」とタイトルが付けられた写真に見える道が、現在の「絹の道」です。桑の木と石仏が見え、茅葺の家屋が写り、当時の鎌水の風景がよくわかります。また、横浜の居留地にいたイギリスの外交官のアーネスト・サトウも、外国人遊歩規定で許された範囲の北限であった八王子にやってきて、生糸商人の家に泊まっています。

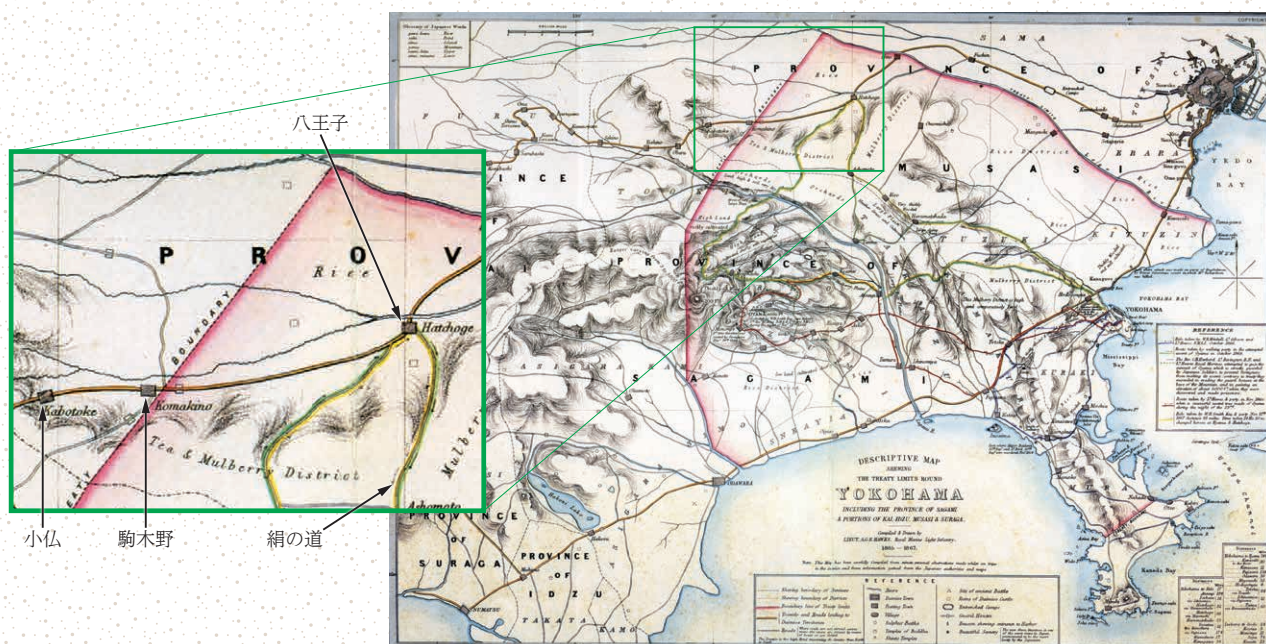
鎌水には、八木下要右衛門が嘉永4年(1851年)に建てた2階建ての洋館「異人館」がありました。ここは外国人を応接するための建物だったといわれています。当時としては珍しい螺旋階段がありました。八木下要右衛門屋敷の跡に建てられた絹の道資料館の敷地内には、今もその遺構が残されています。



幕末に撮影された鎌水の農村「YARIMITACHI」
(横浜開港資料館所蔵)



幕末の絹の道「View on the Road to Hachioyu」
(横浜開港資料館所蔵)



横浜周辺外国人遊歩区域図 (横浜開港資料館所蔵)



絹の道を介して 世界とつながった八王子

明治維新の前後、輸出用の生糸は、八王子はもとより周辺の産地からも集められ、浜街道をって横浜へと運ばれていきました。生糸は、横浜港からの輸出品の3分の2以上を占めていました。浜街道が通る鎌水は、関東地方の養蚕地域と横浜間に位置していたことから、生糸輸出の中継地、仲買地として発展していきました。鎌水の商人は、浜街道をって横浜に生糸を卸し、その収益と西洋の文化を鎌水にもたらしました。鎌水の生糸商人が横浜から持ち帰った本『横はまみやげ』には、アメリカ人やイギリス人などの西洋文化の様子がわかる挿絵が載っています。また、鎌水の商人たちは、英語学習のために練習帳で勉強し、世界との交流を意識していたようです。外国人への好奇心や関心の高さがうかがえます。世界へ向けられた関心は、鎌水に留まらず、八王子の中心部やその周辺の人々にも伝播したことでしょう。このように、八王子の人々は西洋の文化を吸収し、明治時代という新たな時代を歩んでいきました。



鎌水の生糸商人が横浜から持ち帰った本『横はまみやげ』と英語を学習するための練習帳『横文字早学』

主な構成文化財

① 絹の道



市史 日本遺産

〔鎌水〕

幕末期から明治初期まで、八王子から横浜に輸出用生糸を運んでいた道です。この「絹の道」という名前は、昭和32年(1957年)に郷土史家である橋本義夫によって名付けられました。特に昔の面影をよく残す未舗装部分は、平成8年(1996年)に文化庁選定「歴史の道百選」に選ばれました。

② 小泉家屋敷



都有民 日本遺産

〔鎌水〕

多摩地区南西部の丘陵地帯の養蚕農家としての様相をよく残している建物です。現在の母屋は、明治11年(1878年)に再建されたもので入母屋造りの茅葺屋根に、田の字形(四間取り)という南多摩の丘陵地に由来から見られる典型的な農家建築の様式を取っています。上の階では養蚕が行われていました。

③ 八木下要右衛門屋敷跡



日本遺産

〔鎌水〕

八木下要右衛門は鎌水商人として知られ、生糸商で莫大な財を得ました。屋敷の南の隅に建てられていた書院は、別名「異人館」と呼ばれ、訪れた外国人をもてなした場所であったと伝えられています。

④ 永泉寺



〔鎌水〕

永泉寺は、天正元年(1573年)に創建されたと伝わる曹洞宗の寺院です。本堂は、明治17年(1884年)に火事で焼けたため、現在「絹の道資料館」が建つ敷地に残されていた八木下家の母屋を移築して本堂にしています。

⑤ 諏訪神社



市有 建造物

〔鎌水〕

諏訪神社は元々鎌水村内の別の場所にあった諏訪・八幡の2社を子の権現がある現在地に移し、明治10年(1877年)にまとめられたものです。境内には、鎌水商人の寄進による石灯籠が現在も残されています。



日本遺産：日本遺産構成文化財

都府民：都指定有形民俗文化財

市有：市指定有形文化財

市史：市指定史跡



⑥ 道了堂跡



〔鎌水〕

道了堂は、明治7年(1874年)鎌水商人大塚志郎吉が中心となって、浅草花川戸から道了尊を勧請して建立されました。現在は、礎石の跡と灯籠が残り、かつての面影をしのばせています。

⑦ 大塚山公園



〔鎌水〕

大塚山の山頂からは、12州を望むことができたといわれています。公園は、道了堂の跡地を平成2年(1990年)に整備したもので、入口には絹の道碑が建っています。

⑧ 絹の道碑



〔鎌水〕

「絹の道」の名称は、昭和32年(1957年)郷土史家の橋本義夫による絹の道碑の建立に由来しています。

⑨ 御殿橋



〔鎌水〕

この「御殿橋」から「絹の道碑」が建つ場所までの約1.5キロメートルの道が市史跡絹の道(市指定史跡)に指定されています。

⑩ 八王子道道標



〔鎌水〕

横浜と八王子を結ぶ道標として慶応元年(1865年)に建てられました。正面に「此方 八王子道」と大きく刻まれ、東面に「此方は町田 神奈川 富士さわ」、西面に「此方はし本 津久井 大山」とあり、裏面に「慶応元乙丑 仲秋吉日 武州多摩郡 鎌水村」とあります。「絹の道」が盛んに利用されていたころの貴重な遺物です。

文化財の保存・活用事例

文化財見て歩き「絹の道を歩く」

八王子市では、市内に残る原始・古代から近現代までの文化財を「見て歩き」ながら、八王子の歴史文化について学ぶ事業を行っています。

平成30年(2018年)には、鎌水地域を歩き、近世から近代にかけての「絹の道」の歴史について理解を深めることを目的として実施しました。絹の道を通る鎌水は、幕末の横浜開港後、輸出品として注目された生糸の取引で栄華を誇った鎌水の商人の痕跡が多く残されています。



絹の道資料館

平成2年(1990年)3月に開館した絹の道資料館は、生糸商人の八木下要右衛門の屋敷跡に残された石垣を活かし、当時の鎌水の様子や養蚕、絹の道に関する様々な出来事を伝える展示スペース、来訪者の休憩スペースが設けられた資料館です。郷土資料館のガイドボランティアが兼務してガイドを行っています。

